

《シンポジウム報告》

早稲田大学ジェンダー研究所主催

『彼女たちの断片』上映会&講演会

石原燃さんと語るフェミニズムと中絶

Kanojotachi no danpen Film Screening and Lecture

Discussing feminism and abortion with Ishihara Nen

日時：2022年12月9日（金）

場所：早稲田キャンパス3号館4階402教室

タイムテーブル：

第一部

16：30～ 『彼女たちの断片』

（石原燃『夢を見る』所収作品、東京演劇アンサンブルによる舞台のビデオ上映）

第二部

18：15～ 石原燃さん講演

司会：佐久間由梨

聞き手：森山至貴・松永典子

2022年12月9日（金）、ジェンダー研究所主催による『『彼女たちの断片』上映会&講演会 石原燃さんと語るフェミニズムと中絶』というシンポジウムを開催しました。本シンポジウムは、早稲田大学グローバルエデュケーションセンターにおいてジェンダー研究所の所員が中心となり開講するオムニバス講義

「ジェンダーを考える2」の授業中（5、6限）に実施されました。所員に加え、講義の受講生、一般の参加者を含め、100名以上の方々にご参加いただきました。

第一部では、劇作家・小説家である石原燃さん原作の舞台、東京演劇アンサンブルによる『彼女たちの断片』を上映しました。上映にあたり、本作初演の演出を担当された小森明子さんに、130分の舞台作品を90分に編集した大学授業向けの映像を作成いただきました。第二部では石原燃さんをお迎えし、ジェンダー研究所の所員である森山至貴さんと松永典子さんを聞き手として講演会を実施しました。

『彼女たちの断片』の主題は人工妊娠中絶です。物語は、大学生の多部が妊娠し、海外の支援団体から入手した日本では未認可の中絶薬を飲む一夜を描きます。多部が中絶薬を飲む晩に、彼女を見守るために、あるいは偶然にそこに集っていた、年齢も職業も考え方も異なる6名の女性たちは対話を始めます。話題は中絶から個人的な体験、政治や歴史といった社会問題にまで広がります。互いに語り合い、互いに聴き合う営みはまるで、中絶について語るための言葉を探しているかのようです。

『彼女たちの断片』という作品を入口に、登壇者だけではなく、ジェンダー研究所の所員、学生、一般の参加者をも含めたみなで、中絶をフェミニズムの観点から考え議論をすることが、本シンポジウムの目的でした。ジェンダーやフェミニズムが大学でも教えられ、興味を持つ学生も年々増加しているという状況があるとはいえ、性と生殖をめぐる権利・正義（リプロダクティブ・ライツやリプロダクティブ・ジャスティス）について気軽に会話することが難しい状況があるのは変わりません。病院以外で子どもを出産・死亡させたとして女性が逮捕される事件が多発している状況がいま目の前にあるというのに、どうして語ることはこれほどまでに困難なのか。語りたくても、どのように語ればよいのか。聞き手のお一人である松永さんは講演会の冒頭、「どんな問題であってもそれを言語化するというのは思っているよりも時間がかかる。それを共

有するにはさらなる時間が必要である」と指摘しました。

シンポジウムが終わり、中絶について語りはじめるための、ささやかだけれども力強い一歩を踏み出すことができた、という実感を覚えました。講演会は森山さんと松永さんによるインタビュー形式で実施され、フロアとの質疑応答も活発でした。以下、講演内容の一部をごく簡単に紹介し、どのようなことを語り合ったのかについて記録します。

*聞き手による質問および石原さんによる回答は、一語一句を正確に書き写したのではなく、著者（佐久間）による発言内容の要約です。

Q：執筆のきっかけについて教えてください。

石原さん：『彼女たちの断片』を執筆しようと思ったきっかけは、フェミニズムに興味を持ちはじめたことにあります。Me Too運動やフラワーデモが巻き起こる中、日本の中絶医療が遅れているという話を聞き、性やジェンダーについて、セックスや恋愛の話としてではなく、医療や身体の問題として書いてみたいと思うようになりました。

Q：「身体」への関心はどこからきているのでしょうか、中絶薬を飲む主人公をはじめとする複数の登場人物が「私の身体は私のもの」というセリフを口にするにはどのような意味があるのでしょうか。

石原さん：『彼女たちの断片』は、中絶をめぐる紋切型の物語から抜け出す試みでした。これまでの日本の小説にはたびたび中絶が描かれてきましたが、その多くが男女の恋愛や夫婦関係がメインの物語の内においてであり、中絶は一つのエピソードでしかありませんでした。中絶をめぐる具体的な話（費用、場所、避妊、身体など）については描かれてこなかったということです。『彼女たちの断片』は、産みたがる女性と逃げ腰の男性という紋切型の恋愛ストーリーではない形で、中絶と身体を描きだす試みでした。

Q:『彼女たちの断片』は、科学的・医学的な知識およびフェミニズムの議論を多く参照しています。アクチュアルな議論を劇に加えることにより、聴衆が「でも、これってフィクションだよね」という言い訳をして、劇を自分たちから遠ざけ現実から逃げることを許さないという効果を期待しているのでしょうか。

石原さん：フェミニズムに興味のある友人とであれば、中絶を含む科学的・医学的知識やフェミニズムの議論をすることが実際にあり、そうした議論を楽しく会話する日常があるのだから、それを舞台上に出現させてみたかったということがあります。さらに舞台上で役者さんの身体を通した時、科学的・医学的知識が単なる情報としてではなく、その人の言葉に変わるため、役者さんの力を信頼していました。

Q:『彼女たちの断片』にモノローグの場面が多くあるのはなぜですか。

石原さん：セリフを中心としたストレートプレイにおいては、モノローグはあまり使用されません。したがって、会話劇において登場人物に普段言わないことを言わせようとすると、登場人物がそれを言わざるをえない状況を作らなければならなくなります。登場人物を追いつめて話をさせると、過酷な芝居になり、当事者がそれを見るのも辛くなります。当事者が見たいものを作りたいという気持ちから、登場人物を追いつめることなく語らせることのできるモノローグが必要でした。

Q:『彼女たちの断片』というタイトルはどのような意味なのでしょう。

石原さん：『彼女たちの断片』というタイトルは、中絶が経験者の人生の全てではなく「断片」であること、中絶が万人にとって同様の重さを持つ経験ではないことを表わしています。一般的に中絶には女性の不幸という重いイメージがありますが、実際に中絶を経験した人々にとっては千差万別の経験です。

相手の同意や費用がある人々にとっては、中絶は大きなハードルにはならない場合もある。一方で、誰にも相談できないまま中絶をし、意思に反した中絶をした場合には、重い経験となる。中絶をそれほど大きい問題として経験しなかった人々が、傷を負っていないことにより罪悪感を持つ場合もあり、そのような人にはそれでよいのだと言ってあげたい。

中絶のハードルは、中絶についての知識を得ることができるか、経済力があるか、都心あるいは地方在住か、日本語を読むことができるかどうかによっても変わります。たとえば地方に住んでいる移民が中絶の情報を得るためには、二重三重のハードルがあるでしょう。今年に入ってからの乳児遺棄事件は20件あり、それだけの人がハードルを越えられず最悪のケースに至ってしまった。ハードルを越えられる人とそれができない人との不均衡があるのです。

質疑応答

フロアとの質疑応答では、本作品における歌の使用について、教員、劇作家、小説家としての立場から伝えることにどのような意味があるのか、世間であまり話されていない中絶を演劇として上演することはインパクトが大きく勇気があることだと思うが、伝えたい気持ちはどこからくるのか、中絶に対して反対の意見を持っている方々とどう向き合うべきなのか、戯曲はフィクションに基づいているが脚色されている部分はあるのか、などの質問が寄せられました。

ここからは著者（佐久間）の私感を記します。質疑応答で石原さんは全ての質問に丁寧にお答えくださいました。とりわけ、最後から二番目の質問（中絶に対して反対の意見を持っている方々との向き合い方）に対する答えが私の心に残っています。石原さんによれば、不妊治療を続けている、あるいは流産を経験した人々の中には、『彼女たちの断片』に対して強い拒絶反応を持つ方々もいます。中絶してほっとする、という物語に嫌悪感を持つ方々もいます。石原さんは、胎児がいつから人であり命なのかという議論は置いておくとして、

誰にも命を奪う権利はないというとき、同時に、妊娠した人の人権を奪う権利も誰にもないのだ、ということも言わなければならないのだとおっしゃいました。閉会の辞では、村田晶子先生が、中絶を入口にして見える日本社会の人権状況と、誰の支えもなく産まざるを得ない女性たちを通して見える日本社会の状況は結びついているのだと指摘されました。中絶について語ることは、周縁化された人々の権利について語ることでもある、これは、私にとって大きな気づきでした。

中絶をはじめとする性と生殖の問題について、私たちはまだ語る言葉を持っていないかもしれません。けれども、村田先生が戯曲のセリフを大事に受け取って勉強の機会にしていきたいと述べられたように、研究会や大学の授業という場においても議論を続けていくことが必要だと思います。

最後に、講演をご快諾くださった石原燃さん、上映作品を編集してくださった小森明子さん、講演会においでいただきスピーチもしてくださった俳優の志賀澤子さん、聞き手の森山至貴先生、松永典子先生に、心より感謝申し上げます。